

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成30年1月 第203号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

## 謹 賀 新 年

自然界も人間社会も絶えず大きく変化し、「十年一昔」の世の中を人は、柔軟に変化し多様に社会を発展させて、しなやかに、したたかに、たくましく、生きて来ました。

数ある動物の中で人間だけが、集団の中で老いの身の終焉を仲間に委ねて「相互に作用し合う関係性」を築き、その後にも続く相互関係の中で、子や孫が自らの「思想と社会性」を育み、しなやかで逞しい「生活力」を養います。『人の命』は世代を超えて永く、「縁ある人」の心の中で『創造力』を発揮して生き続けるのです。

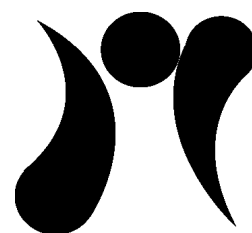
人生百年。自らの長い老いに備えて、しなやかな生活力を養い、豊かな『創造力』を蓄えるに当り、ご家族と協働して皆様を介護できる幸せに、心より感謝致します。

平成三十年元旦

## 長寿社会とバトンタッチ

— 『相互に作用し合う関係性』が拓く未来への道—

今や『人生100年』。職場での定年55才が、60才に、65才にと伸び、今では70才でも75才でも働ける内は働く仕組みへと変化しています。そして2025年問題。団塊の世代に対して『老いを如何に生きるのか?』と鋭く問い掛けます。同世代約800万人が後期高齢期に入り、其れから約25年で一つの「人口ピーク」が終わりますが、その頃には団塊ジュニア約600万人が後期高齢期に入り、其れからまた25年で人口のピークが過ぎて『少人口社会』です。一昨年の出生児が98万人余、昨年が94万人余、になった事実は『人生の収穫期』を迎える団塊世代に対して、社会の第一線を退いて『バトンタッチ』に備える覚悟を問い掛けます。ジュニア世代や孫・曾孫に100年先にも役立つ実りを『残せるのか?』と鋭く問い掛けます。 (次ページに続く)



(前ページの続き)

今、テレビコマーシャルでは『健康サプリ』が溢れ、「老いても健康でこそ幸せ」「健康寿命を伸ばそう」と『健康志向』を煽ります。『ピンピン・コロリ』が老いの理想と、医療も介護も予防を重視し、世間の人にはひたすら健康を望み、『介護は迷惑』と受け取ります。と同時に、病気に罹ると何歳に成ろうとも『治療・回復』を優先して「最先端の医療技術」を投入します。その結果平均寿命は延び続けて男性80才・女性87才と、世界有数の長寿国に成りましたが、「高齢者の社会保障費」に四苦八苦しています。「年金・医療・介護」の費用を賄う為に『国の借金』が増え続けて今や千兆円を優に超え、総額千数百兆円と云われる『国民金融資産』を遠からず超えそうな勢いで、「国家の財政危機」が危惧されています。一方でこの40年間、生まれる子供の数が減り続け、此のまま減り続けると『近い将来消滅』する自治体が生じると予測されています。

100才も稀ではない『長寿社会』、年間の新生児が90万人余の『少子社会』、遠からず負債が国民総資産を超えそうな『財政危機』、が同時に進行すると、新生児達に掛かる負担が過大であり、『孫や曾孫に多大な借金を残して良いのか?』と団塊の一員として大きな責任を感じます。

「老いと死と介護」は「妊娠・出産・育児」と共に、『自然の摂理』に添った『生命活動と暮らしの一環』として『連鎖と循環』を繰り返す、人間ゆえの『思想』を育み、豊かな『人間性と社会性』を養う極めて重要な営みです。現在はその「連鎖と循環」が分断されて、「思想や人間性・社会性」が極めて貧弱な社会に成ってしまった様に思えます。

我々はこの数十年「老いに抵抗し」「死を避ける」為に、自然の摂理に添わない手段を様々に用いて健康と長生きを望み、長寿社会を実現しました。其れと並行して、『子は授かりもの』を超えて妊娠の時期を選び、性別や障害の有無によって産み分ける技術を用いて、「親の都合」に合わせた妊娠・出産を望み、実現したのです。老いも若きも、自然の摂理から目を背け『目先の都合と個人的願望』を優先して『命にまつわる選択』を積み重ねた結果、要介護老人や幼児の虐待事件が頻発して命から命への『バトンタッチ』が成立せず、子供達に過大な負債を残すという、極めて不合理・不条理な状況を生み出しています。『長寿と少子と負債』が同時に進行する「目先の都合・願望」を優先する連鎖と循環を断ち切り、生活サイクルの中に自然の摂理に添った『命の連鎖と循環』を取り戻す努力が重要です。

「老いて死に逝く命」を支える介護も、「無防備な姿の乳児」を慈しむ育児も、共に一方通行ではなく『相互に作用し合う関係性』を持った『命の営み』であり、「思想や人間性・社会性」を豊かに育む力を秘めています。長寿社会であればこそ万人が、そのしなやかな生活力・生命力を後輩たちに委ね、「命の営み」を積み重ねる中で『バトンタッチ』を成立させ、『命の連鎖と循環』を繰り返して明るい未来を拓く事が可能になると確信致します。



## 介護についてみんなで語ろう会

『りょうえんカフェ一番星』

平成29年11月24日(金)

今回の語ろう会では、『認知症カフェ』がテーマです。せいりょう園では当園にお住まいの方・ご家族・地域の方・職員が交流できる場として『りょうえんカフェ一番星』（認知症カフェ）を開催しています。ボランティアさんが「コーヒー、紅茶どちらがいいですか?」「砂糖、ミルクは?」と尋ね、一緒にお茶をいただきながらお話をします。そこで、今回は語ろう会にご参加いただいた方にお茶を用意していただきました。参加者の中には、今回初めてという方もおられ、その中にはせいりょう園が兵庫県社会福祉協議会から委託を受けた「一日介護体験」の受講者もいらっしゃいました。

参加者からは、「何を話していいかわからない」「逆に気がつかけてくれた」「話をしてくれると気がほぐれた」「私の隣にいらした方も認知症ですか?」「話がかみ合わなかったけど、歌になると歌詞なく2番まで歌い楽しそうだった」「主役である本人が参加できていることが良かった」「集まることを嫌う人もいるが、集まって何気ない話をしたり、歌う姿、一人一人が生き生きしていた。話が嫌いな人もいて、話しかけなくてもいいんだと思えた」と、沢山の感想を頂きました。どのテーブルも笑い声が絶えず聞こえ、自然と始まった歌が、最後には大合唱♪ 30分と短い時間でしたが、気持ちが自然とほぐれる会になりました。お年寄りからも、「もう終わり?楽しかった」「また来てね!」と声が出ていました。

認知症は「迷惑をかける困った人」「何もできない人」、老人ホームは「近寄りにくい」というのが世間の印象ではないでしょうか。しかし、認知症の方は70・80・90年と長年の生活で培った感性や感覚で、ありのままの姿を見せて下さいます。今回のような関わりでは、ご家族や介護職という時とはまた違った姿を見せて下さいます。そして、その姿に寄り添うことが介護職の学びになると思います。

今回の語ろう会では、私たち介護職が日ごろ感じていることを、参加した皆様に少しでも感じていただける時間になったと思います。

相談員 福田 真希

### 【理事会より報告】

社会福祉法の改正に伴い、平成29年6月より理事会が新たな体制となり、当法人では定期的に理事会を開催し、新事業を検討しています。内容は以下の通りで、来年度も引き続き取り組んでいきます。

- 空き家対策のグループハウス（シェアハウス）はせいりょう園から徒歩数分程度のところにある家を活用します。現在設計士が建物の耐震補強についてどのような方法が良いか検討しているところです。入居の対象は高齢者や障害者で、小規模多機能型居宅介護、定期巡回随時対応型訪問介護看護等を利用し、最期までグループハウスで生活することができます。
- 障害者支援は喫茶ラヴィックの南側に作業所の設計を依頼し、就労支援B型事業所を迎えます。
- 事業所内保育は補助金を申請し、自愛の家さくらの1階テナントに来年度の開設を目指します。正規職員やパート職員に限らず、地域の0~2歳児も入園できます。
- 放課後児童クラブ（学童保育）はリバティかこがわのフィットネスルームで今年の夏休みから利用できるよう準備しています。また、「NPO法人子育てサポート☆きらり ing」が親子のふれあい、親同士の情報交換の場として、年6回『にこにこ in せいりょう園』を開催しています。



## Tさんの看取りを振り返って

地域密着型特養 富田 徹  
(介護福祉士)

Tさんは平成26年9月10日よりせいりょう園での生活を開始されました。せいりょう園に来られた当初より頻回に高熱がみられ、血圧も変動しやすく、長い時間ベッドから起きて過ごすことも難しいお身体でした。しかし“元力士”という凄い経歴をもつTさんは、決して自ら体調不良を訴えず、こちらが気にかけても決まって「なんともないですよ」と、明るく笑ってお答えになる強い方でした。力士時代のことについては詳しく教えて頂けませんでした。生活のすべてをどっしりとした物腰で受け入れ、不満や愚痴のひとつこぼさないTさんからは、とても格好いいお相撲さんの姿が想像できました。

体調が安定せず、体を動かすこともままなりませんでしたが、起きて食事することに強い気持ちをもっておられました。手に力が入りにくく、視線もご飯に合わせづらく、スムーズに食事をするのは大変困難でしたが、「ぶつかり稽古」と自らを鼓舞し、手に力を込め懸命に食事されました。食事の後は疲れも見受けましたが、その表情はいつも晴れやかでした。

しかし、今年に入ったあたりより、段々とそのお姿が見られなくなっていました。食事を前にしてもぼんやりとされ、スプーンを持っても食器に手を伸ばすことも難しく介助することが増えるようになりました。夏頃になると十分に噛み切ることが出来ず口の中に食べ物が残りやすくなり、むせ込むことが目立つようになりました。

それでもTさんは形がある物を食べることに強くこだわりました。あまりにもむせ込みが目立つ為、唐揚げを途中より柔らかい形態に変えて介助した際には、怒った口調で「はよ唐揚げちょうだい」と珍しく感情を露にされました。Tさんに満足して食事を楽しんでもらいたいと思う一方で、安全に食事をしてもらいたいという考えが強くあり、悩みました。職員間で意見を交換し、その日その時の状態に応じて食事形態を柔らかくしたり、元に戻したりを繰り返すなか、いつしか柔らかい物を口にしても気にする素振りを見せずに食事されるようになっていました。いま思い返すと、Tさんが身体に起こる変化を感じ、受け止められた時期であったのかもしれませんが、10月に入ると食事も水分も飲み込むことが増々難しくなり、日に日に状態の低下が見受けられるようになりました。

10月29日の朝食時、ベッド上のTさんは食事をほとんど食べることが出来ず、「俺どっか悪いんやろ?」と言葉にされました。翌日の午後、70歳で静かに息を引き取られました。医師より無理に食事や水分を勧めず本人にとって負担の少ない対応をするように話が合った矢先のことでした。

ターミナル期を迎えた御家族より「あとどのくらい時間がありますか?」と質問を受けることがあります。食事や水分が摂れなくなってから何日も命を繋ぎとめられる方、容体が急変した直後にお亡くなりになられる方、これまで看取りを経験させて頂いたなかで自分が知る限り、最期の迎え方はお一人おひとり異なり正確なことはお答えできないでいます。ただ、人生を締め括られたどの方も、最期はとても安らかな顔をされています。側で看ているこちらには分からないその方の意識や感覚、細胞の奥深くで人生の最期を迎えるにあたっての準備や覚悟がされているのではないかと、穏やかな表情で旅立たれたTさんとの時間を振り返りそのように思います。

## ○さんの看取りを振り返って

ユニット型特養 福井 真希

平成29年10月25日の夜に○さんはお亡くなりになりました。95歳でした。私が○さんを見かけたのは、今から2年程前の休憩室です。マッサージチェアに座ってうとうとされていました。颯爽と老人車を押してマッサージチェアに座りに来ていましたが、いつしか○さんの姿も見かけなくなりました。その後、私がユニット型特養へ異動した際に○さんと再会し、『新しい方？何歳？私は90こえているのよ』と優しく話かけてくださいました。

○さんに「何かやってみたいことはありますか」と聞いたことがあります。『もうこの年になってやりたいことはないね、う～ん…美味しいものが食べたい』と、にっこり笑い話をくださいました。お菓子が好きな方で、買い物外出では予算オーバーするほどのお菓子を買って、夜中に食べていらっしゃいました。しかし夏ごろより高熱で食べる量も減り、徐々に動くことが困難になってきていましたが『死んでも買い物に行きたい』と話されていたそうです。そこまで買い物に行って何を買いたいのか気になりましたが、それ以降は、お話してもらうなだけで、○さんからは声も聞けませんでした。

○さんは自分の思いを話す方ではありませんでした。しんどくても高熱であっても「しんどいのですか？」と聞くまでは本人の口から「しんどいんです」と、聞いたことがありません。よく胸を押さえておられ、痛みがある様子でしたが、いつも「恋煩いよ」と微笑んでいました。徐々に老人車で少し歩行するだけでも疲れ、休む時間が増えていきましたが、時間をかけてでもホールへ出てこられ、おしぼりや洗濯物を畳もうとしてくださいました。しかしそのような○さんの生活を、私たち職員は奪っていくようになりました。「手が汚れているから洗濯物を畳まないで下さい」「トイレにいかんとおむつしてくれたら…」という言葉が聞こえるようになりました。今思えばトイレが汚れていたなら掃除をすればいいし、服が汚れたら着替えていただければいいこと、汚れた手は洗っていただければ洗濯物を畳むこともできます。しかし職員の考えで○さんが自分で出来ることをダメと言ってしまい、なぜ想いを奪ってしまったのだろう…と後悔しています。○さんは○さんなりの生活を、自分で出来ることをされていたのにもかかわらず、出来ることをこちらがしてしまい○さんなりの生活ペースを崩してしまったと思っています。

どの方もお亡くなりになってから気づくことが多くあります。毎回後悔することがありますが、学ぶこともあり、後悔を引きずるのではなく次に向けて学んだことを生かしていきたいです。そして本人の思いをもっと感じ取り、みなさんが生活に困っているとき、支えられるようなお手伝いをすべきだと思いました。みなさんが持てる力のベストを尽くして生活できるように私も日々ベストを尽くして頑張っていきたいです。

### 【せいりょう園空き情報 平成30年1月9日現在】

- サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」  
19.07㎡：7室、20.33㎡：1室、24.67㎡：2室、25.80㎡：2室
- サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」  
33㎡：2室、35㎡：1室、39㎡：1室
- ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- グループホーム：空きなし ●グループホームまどか：空きなし

【問合せ先】 せいりょう園 Tel(079)421-7156/(079)424-3433



富永 千恵(准看護師)

医療現場から福祉へと、せいりょう園に入社してから 10 年がすぎました。いつも通る道端には時々コーヒーの香りが漂っており、今日も一日頑張っていこうとユニフォームに着替えています。

10 月の末に、歳を重ねデイサービスの利用が可能な年齢となりました。利用者さんの隣に座っていても何の違和感なく過ごせる自分に笑ってしまいます。最近思う事は、いつか訪れる介護が必要となる自分についてです。高齢者になって長い人生を歩んで来て、自分の身体が思うようにならないもどかしさなど、現実を受け入れることはとてもつらく難しいことだと思えます。

一日一日を大切にし、後悔しないよう仕事の上でも言葉や態度、利用者さんの笑顔や「ありがとう」の言葉を喜びと感じられる自分であるようにこれからも努力して行きたいと思えます。

神戸 瞳

私が介護の仕事をしたと思ったのは、独身時代に看護助手をしており人の役に立つ仕事にやりがいを感じたからです。

結婚して子供が生まれ、9 年近く専業主婦をしていました。子供たちも大きくなり手が離れる時間が増えたので、もう一度人の役に立つ仕事がしたいと思いきりょう園で働き始めました。

私は資格を持っていません。仕事を辞めてから年月も経っていましたが。介護の仕事についたこともなく、未経験でデイサービスにて働き始め、最初は利用者の方々のお名前を覚える事がとても大変でした。また入浴介助の時やトイレ介助の時などに、利用者が転倒したらどうしよう。何かあったらどうしよう。などと考え、とても怖かったです。

私にこの仕事ができるのか毎日が不安で、利用者の方へのちょっとした声掛けやコミュニケーションのとり方がとても難しく感じていました。上司や先輩職員より、常に「大丈夫?」「分からないことがあったら遠慮せずに聞いてね。」と声をかけて助けてもらいました。一から丁寧に教えてもらい、もうすぐ働き始めて 10 ヶ月程になります。朝の送迎や入浴介助、トイレ介助をしたときに利用者の方から「ありがとう」と言ってもらえるとすごく嬉しく感じます。今でも分からない事や不安になる事がありますが、その都度教えてもらい勉強しながらこれからも頑張っていこうと思えます。

大塚 和美(看護師)

看護師の資格を取ってから病院勤務が長く、平成 26 年 1 月から 2 か所の特養で勤務をし、現在はせいりょう園のデイサービスで働いています。

利用者それぞれの方が歩んできた中で障害を持ち、認知症にかかりながらも、生活をする人を見ることが多くなってきています。利用者とは出会い名前を覚えてもらうのに時間がかかった人、まったく覚えてもらえない人といろいろ、そして私も覚えるのに同じくらいの時間が必要でした。自分もいずれこの道を歩んでいくのかと考え、これからあと何年仕事ができるのか、少しでも人の役に立てるのか、自分のこれからの時間何か出来ることはないか、心残りのない楽しいことも考えている途中です。



平成 29 年 4 月から約半年、せいりょう園の地域密着型特養に勤務しています。

私は福祉科の高等学校を卒業後、せいりょう園に入社しました。高校生の頃から介護実習やボランティア活動でお世話になっていたため、顔見知りの利用者や先輩職員もおられ、早く職場に馴染むことができたように思います。認知症のある方と初めて関わった際には関わり方さえわかりませんでした。ボランティア活動で多くの方とコミュニケーションを図ることによって人との関わり方を学びました。また、介護実習では現在勤務している地域密着型特養でトイレ誘導や水分補給の介助、おむつ交換といった業務の見学をさせていただいたことがあり、とても良い経験になりました。

しかし、実際に働いてみるとおむつ交換、トイレ介助、食事や水分補給の介助と、その準備・後片付け、記録といった業務の流れがあり、実習やボランティアのように一人ひとりの利用者やゆっくりお話をする時間や、折り紙を折ったり一緒に歌を歌ったりする時間はほとんどありませんでした。入社して間がない頃は余裕がありましたが、仕事を覚えるにつれ余裕がなくなっていきました。それだけ仕事を覚えたということですが、余裕がないことで焦りや不安を感じ、利用者への関わりがきちんとできなくなるのは良くないと思います。業務も大切ですがもっと大切な事は利用者の声に、言葉に、耳を傾けることだと思います。利用者の中には、認知症で同じことを何度も訴えられる方や、思っていることが上手く口に出せず暴力を振るう方もおられます。そのような方でも表情や仕草をしっかりと見ることが必要だと先輩職員に教わりました。

入社してから現在まで、毎日関わってきた利用者が数名亡くなりました。亡くなられる瞬間に立ち会ったこともありました。亡くなってからあの時もっと丁寧に対応していれば良かった、もっと声をかけてあげれば良かったと思うこともあり、私たち介護職はいつ途絶えるか分からない利用者の貴重な日々の暮らしを支えさせて頂いているということを深く実感しました。

最近仕事にも大分慣れ、利用者への言葉がけ、観察をしっかりと行うようにし、利用者寄り添うことを目標に日々の業務に勤めています。利用者笑顔で「ありがとう」と言われる瞬間が私にとっての喜びです。高齢者の方々の貴重な一日一日を共に歩むことができる介護職って素敵だと思います。これからもこの仕事に誇りを持って働きたいと思っています。

### ～厨房便り～

新年明けましておめでとうございます。

せいりょう園では、クリスマス会・おもちつき・お正月と毎年恒例の行事を終えて、日常が戻っています。毎年この時期は慌ただしく過ぎていきますが、入居者の方の中には「もうそんな時期か」「今年もこの季節がきたのね」と言われる方もいます。その言葉を聞くたび、行事が入居者の皆様に季節の移り変わりを感じていただけるきっかけになっていることを知り、嬉しく思います。

今年もさまざまな行事を開催し、入居者の皆様の生活に「彩」を添えられるようにしていきたいと思っています。

管理栄養士 田村 愛弓



## 園内行事

### ●クリスマス会：12月24日（日）



今年も多くのボランティアの方々が、様々な催し物を開催してくださいました。入居者の方々は思い思いの催し物に参加し、楽しめました。また今年はお茶会を開催し、入居者の方々とご家族、職員とでテーブルを囲んで様々な話に花を咲かせ盛り上がりました。

### ●おもちつき：12月26日（火）

新年を迎えるための大事な行事、おもちつきが今年も行われました。ボランティアの方々がもち米を蒸して、臼と杵で立派なおもちを搗き上げてくださいました。おもちつきを見ると血が騒ぐかのように活気が出て、車いすから立ち上がって杵を振り上げおもちをついてくださる方もいらっしゃいました。



～ ボランティアの皆様ありがとうございました ～

## 職員親睦会旅行

### ●北海道編：10月18日（水）～20日（金）



北海道旅行へ11名が神戸空港を出発しました。

千歳空港に到着して早々、札幌ラーメンを食べて北海道の味覚を堪能しました。その後は3台のレンタカーに別れて、ある組は支笏湖や新日本3大夜景の藻岩山へ行き、また別の組は北海道のグルメ食べつくしに繰り出したりとそれぞれが各行程を楽しみました。期間中は天気にも恵まれ、秋の北海道を満喫して参加者一同大満足の旅となりました。

### ●台湾編：11月9日（木）～11日（土）

初めての海外企画として14名が、緊張する入国手続きを待っていると有名人！うれしいハプニングから始まりました。雨が多い「九分」も快晴で、台湾の人とふれあい、美味しいものもたくさんいただきました。自由行動では地下鉄に乗ってお茶屋さん、台北101、デパート、台湾ならではの本を探す者、思い思いの目的を達成し、親睦も深まった旅行でした。次の企画が楽しみです♪



### ●長野編：12月1日（金）～2日（土）



旅行の前日は、何歳になってもわくわくするものでした。名古屋での昼食「ひつまぶし」に舌鼓をうち、妻籠宿で江戸時代にタイムスリップし、地酒と美味しい料理に野趣味あふれる大露天風呂での談笑。そして、関が原で豊臣から徳川幕府にいたる歴史を辿り、近江八幡で「三方よし」の近江商人の精神・家訓を理解し、私自身の話題の筆笥の引き出しが増えました。更に女性達は、近未来的な土産物店ラ・コリーナで、嬉々として長蛇の列に並びゲットしたバウムクーヘンは、最大の喜びだったのではと想像しています。職種も違い、年齢も大きく差のある男女8名による親睦旅行の二日間は、濃密な時間を共有した楽しいたびでした。